

城里町の文化財さんぽ(四〇)

町指定有形民俗文化財

「徳蔵寺の駕籠」

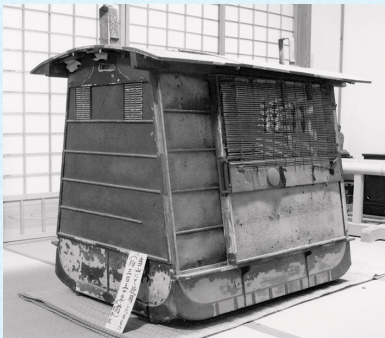
指定年月日／昭和五八年三月三十一日
所在地／城里町徳蔵
管理・所有者／徳蔵寺



▲正面から撮影

竹の「かご」に人を乗せ、一本の長柄を前後二人の人間が担いで運ぶ駕籠は、安土桃山時代以降に普及したもので、装飾を施した高級な「乗物」と、一般的な「駕籠」の二種に大きく分けられます。「乗物」は、公家や国持大名等の特別な身分にのみ使用が許されたものです。「駕籠」には、大名の「御忍駕籠」や武家の「権門駕籠」、町方の富豪が使用する「法泉寺駕籠」や「あんぼつ」、庶民用の簡素な「四つ手駕籠」など数多くの種類がありました。

町指定有形民俗文化財「徳蔵



▲右斜め後ろから撮影

問合せ 教育委員会事務局
029-1288-13135

寺の駕籠」は、江戸時代の徳蔵寺歴代住職が使用した寺院用の駕籠です。駕籠本体は、黒彩の杉材と朱彩の網代、金属の飾板からなり、前・後面の窓と出入り口の窓には、簾を掛けています。出入り口は引き戸で、乗降の際には屋根の一部が上がります。駕籠内部には肘掛を設え、右側の引き戸には三つ笹竜胆紋を毛彫りした金属板を付けています。全長は一〇三センチメートル、全高は九六センチメートル、全幅は七五センチメートルで、重量は二〇キログラムほどです。

現状はかなり傷んではいますが、県内では数少ない寺院駕籠として貴重な存在です。

解説文／町文化財保護審議会会長小山映一

俳句

山百合の香る坂道瀧しぶき 鯉淵 寿美恵
物置の扉の軋み盆用意 今瀬 多代美
盆送り足の揃はぬ茄子の馬 綿引 英子
どこからも汗の吹き出て生きてをり 中野 千賀子
稲穂ずつしりと豊作の兆しなり 仲田 まちゑ
青カーテン数へきれない花へちま 森 静江

文芸しろさと

短歌

片足のことじ灯籠の兼六園 杉山 みちこ
若き日の旅思ひ出だせり 杉山 みちこ
みどり野を葉音残して駆け来たる風受けて立つ吾の文月 大森 久子
ひと株つつ吾が手に植ゑし紫陽花の境内を彩るこの季がすき 渡辺 千紗子
下校して会瀬の海へ友と行き泳ぎたりし日楽しかりけり 所 美恵子
燕舞ふ「デイサービスセンター」の窓の辺に車椅子寄せてかたらふ 青柳 京子

鱗雲左右に分かれる下校列 飯村 昭子

川の字にかつては眠り夏座敷 竹内 幸子
淋しくて秋の風鈴鳴りにけり 瀬谷 博子
漣に遅れて動く蓮の花 田口 勝元
デイの午後陶芸学ぶ暑き部屋 岩下 金司
青空へ咲きほこるごと百日紅 寺門 孝子

川柳

検診の十日前から酒を断ち 富田 多蔵
白衣見て上る血圧検診日 車田 綾子
蛙君うまく逃げたね草刈機 飯村 孝一
夏休み子供相談親が聞き 川原 清

亡き夫を家の宝とふ優し孫娘らと面影語るお盆の部屋に 山形 式妙
豆粒の様な雨蛙も一人前ピョンピョン跳ねて上手に逃げる 枝 不美

連日の猛暑のなかに咲きはこる百日紅の幹のかゞやき 島 愛子
気がねなく昼湯につかり嫁の愚痴次に出るのは孫等の自慢 信田 育子
深き雪解けたる縁の兩岸を映す只見湖に遊覧船行く 萩谷 登喜子
盃蘭盆に母と語らむこもごもを盆提灯の灯のもとに 富田 佐智子

